

論文

現代中国におけるフェミニズムと文化研究

——戴錦華を中心として——

桑 島 由美子

要 旨

改革開放後、中国において、人文学領域は知の転換を迎える。90年代、急速な社会経済変動により、知識人の主導的立場が後退する中で、80年代の人文エリートによる啓蒙主義を継承し、過渡期の社会経済現象に対して批判的立場を貫いたのは、ジェンダーの視角を方法論とした文化研究の潮流であり、戴錦華による文化批評、学術著作は、最も先鋭的かつ高度に理論化したテキストとして注目を集めてきた。

同時期日本で翻訳、紹介され中国近現代文学・映画研究に一つの波紋を投げかけ、女性文学史・文化研究のメルクマールとなった周蕾の『女性と中国のモダニティ』『プリミティブへの情熱』とは、方法論的に共通点も見られる。この女性研究者二人による「フェミニズムと文化研究」の実践は、グローバル化文化想像のもとで変容する中国像と、表象文化に着目した「文化の政治学」の文脈における理論的实践として高く評価される。

香港出身で在米の華人研究者である周蕾に対して、戴錦華もアメリカ、東アジア等の国際的な舞台で活躍し、ポスト冷戦時期のジェンダー・ポリティクスに新しい知見を開いて来た。北京大学に文化研究の基礎を築き、今日最も著名な批評家の一人である戴錦華に焦点を当て、その学術研究の端緒を開いた女性文学史研究と、文化研究について考察を試みたい。

キーワード：ラカン派フェミニズム思潮、「象徴界」と「現実界」、二十世紀文学と新时期女性作家、張愛玲をめぐる言説、女性の表象

と民族・国家，新左派による大衆文化論

(1) 文化研究と文学研究

戴錦華は、1982年に北京大学を卒業し、80年代には最初に、北京電影学院に職を得たと言う機縁から、後に奉職する北京大学において、90年代には、文化研究と映画研究の専攻を創立、普及させ、当該研究分野の学術的な基礎を築くという重要な役割を担った。

映画研究、マルクス主義フェミニスト、メディア批評、文化批評など多面的に活躍する戴錦華は、欧米圏の批評理論を思考の源泉としつつ、女性の物語や形象が果たしてきた抽象的な意味と機能のパラドクスを追求し、ポスト冷戦構造、アジア的想像力を構築する「中国女性書写（エクリチュール）」の可能性を模索する。長いキャリアを背景に、研究の舞台も、南米、日本、台湾など海外の大学、研究機関で教学・研究活動を行うなど、活躍の場は広く、その著作、テキストも極めて、膨大である。英文で書かれた著作も多く、学術論文は、フランス語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語、日本語、韓国語などに翻訳されている。

戴錦華が国内外で注目されたのは、1989年の時点でポスト構造主義の分析視角から、哲学的思索を極めた文学史『歴史の地表に浮かび出る』¹⁾に於いてである。80年代「重写文学史」の提起に呼応し、女性文学史として作品論、作家論の蓄積が無い中で、ポスト構造主義、記号学、解釈学などの方法、中でもラカン派フェミニズムの潮流を意識した精緻なテキスト批評は、国内外で高い評価を獲得した。序論に於いて、父権制という統治秩序（記号体系）と歴史的無意識をめぐる言説分析により、近代における民族主体としての女性の歴史が再考される。その詩意と意象（イメージ）を喚起する珠玉の文体は、銭理群の「民族の魂を改造する文学」を想起させる。またこの著作からも窺えるように、ポスト毛沢東時代のフェミニズムは、民族、国家、階級という命題を焦点化している。

『歴史の地表に浮かび出る』は、1917年から49年までの中国文学をフェミニズムの視点から論じている。五四期以降の新文学は、主として男性作家によって描かれ、五四時期の女性像の代表的タイプは、魯迅の「祥林嫂」から解放後の「白毛女」に至る貧窮の女性、ブルジョワ革命を体現していた都市の「新女性」等であった。作家論としては、廬隱、馮沅君、謝冰心、凌叔華、丁玲、白薇、蕭紅、蘇青であり、女性作家として最終章に取り上げられるのは、張愛玲である。1989年という時点での大陸における張愛玲論としても、特筆すべきであろう。私見ながら、張愛玲の文学は、戴錦華が主張するように、無意識の次元で、張愛玲の「国族」「国度」意識を体現するものであり、女性形象の不確定性や、基調に流れる「亡国」の哀感についても、張愛玲文学の独異性として感知されている。戴錦華が、李安の映画「ラスト・コーション」²⁾に対しての批評文の中での評価にもそれが窺われる。

新時期文学女性作家論としては『涉渡之舟—新時期中国女性写作与女性文化—』があり、緒論「可視あるいは不可視の女性」に続く作家論の第一章は『張潔：“世紀”の終結』であり、「戴厚英：空中的足迹」「宗璞：歴劫者の本色与柔情」「謹容：温情中的冷面人生」「張抗抗：一叶“霧帆”」「張辛欣：在同一地平線上」「王安憶（一）：一冊安妮・弗蘭克的日記」「王安憶（二）：話語迷宮内外」「鉄凝：痛楚的玫瑰門」「劉索拉：狂舞中的迷茫与痛楚」「殘雪：夢魘縈繞的小屋」「劉西鴻：女人的都市即景」「方方：別一樣的行雲流水」「池莉：煩惱人生的神聖」「尾声或序幕：90年代女性写作一瞥」と続く。「文学」ではなく、「エクリチュールと文化」というサブタイトルになっていることから窺われるように、徹底したテキスト分析のみを方法論として、思想及び、社会文化史的背景と作品とを融合させている。

女性作家論の一例として、第一章に当たる張潔論、「張潔「世紀」の終結」について概観しておきたい。精神の旅程の筆記としての張潔の作品系列は80年代の最も重要な文化史料であり、同時代知識分子の「涉渡之筏」であると言う。張潔は苦悩する現実主義者、理想主義者として同時代を描いてきた。80年代という共産主義でも資本主義でもない全てが過渡的である時代にあつて、彼女の作品は傷痕文学と啓蒙主義によって構成される人文景観を背景としている。

愛情の背後にある社会、変遷する社会への関心を強く持ち続けてきた作家であり、初期の作品については、張辛欣による張潔評が引用されている。表象としての愛、記憶、夢の谷間について触れている。『愛、不能忘記的』（忘れ得ぬ記憶）『祖母緑』（エメラルド：忘却のための記念）は追憶と記憶を主題とする。歴史の勝利者の記録とは異なる、心霊の真実であり、「愛」に関わる記憶と追憶は、歴史的空間と歴史的記憶を廃墟とみなし、贖罪と帰属の表明は、經典のユートピア言説となる。ツルゲーネフの影響などが窺われ、西欧の「19世紀言説」が構築した「夢の谷間」に未来を付託して、船を漕ぎ出す精神の漂白を描いている。

張潔独特の詩意として、音楽と子供、大森林、白いキノコ、横笛などが、女性特有の暖かさと憂鬱の表象となり、土着の芸術家としての直感と文化的反抗によって、10年の災難の後、女性の真実に立ち戻る。プラトニック式の恋愛観、および「汚染されていない浄土」「女性のユートピア」というイメージは、天真爛漫である。理性的な人文主義の立場と彼女自身の直感的、体験的な女性としての立場は、彼女の叙事言説に間隙を生じた。社会を誹謗する上で、あまりにセンシティブで、過度に敏感で強烈な被害者意識は時に批判をも受けた。80年代でもっとも重要な作家であり、才能と情熱を兼ね備え、人生の些末な描写を超越して「靈魂と肉体」の葛藤を描き、90年代世紀末には、時代の凋落を目の当たりにして、「西方と東方」が一つの主題となり、国際的な活躍の場を得て、世界に踏み出していく。³⁾

戴錦華の代表作である二つの女性文学史著作は、中国フェミニズム研究に里程標を打ち立

てるが、同時に80年代から90年代への転換を、文化研究の陣地における大衆文化批判へと傾斜させていくのである。

(2) 新左派理論とエリート文化

改革開放以後の、中国における西欧文化理論の受容について、筆者はこれまで一連の論稿を通して、フランクフルト学派に饗応し、欧米等に留学して、政治学、精神分析、比較文学、社会学等の理論に依拠し、知の転換期を担った「新左派」と、グローバル文化想像の下での、彼らの言説について考察を進めて来た。所謂新左派の特徴としては、80年代の人文啓蒙主義を支えた知性が、西側の政治学や、社会経済学を批判的に取り込み、マルクス主義理論を基礎に文革期への独自の歴史的省察、評価や、グローバル化批判を展開している点にある。それは90年代の中国社会経済に対する階級分析や、映画研究、文化研究が国際的視野を獲得し、国際的緊張の中における中国文化政治の使命を自覚するに至る過程でもある。

戴錦華の研究と文化批評は、80年代啓蒙主義の終焉と、知識人の地位後退の中で、精英(エリート)文化の延続、継承の足跡が認められる、稀有な事例であり、所謂研究分野としてのフェミニズムの枠組み、領域を遥かに凌駕している。改革開放後の文壇には、澎湃として出現した、一群の女性作家によって女性言説が主流を占め、“新时期文学”においても攻勢を強めたが、これは近現代文学史における、イデオロギーの終焉ではなく、戴錦華の『涉渡之筏』で詳細に分析されるように、消費主義の饗宴が席卷するポストモダン状況の中で、フェミニズム文学のみが、過去のエリート主義の言説を繋いでいたことを如実に実証している。

新时期女性文学としては、文革の批判から、文革後の批判まで、中国社会の諸問題を告発することと、作風、題材において抑圧されてきた「女性的なもの」を描くという傾向が強いが、これは「中性的」な文学が、「男性化」の強要であったということへの反動であり、盛英主編『二十世纪女性文学史』では、従来の文学史では黙殺された作家、狭義の作家に限らず、ジャーナリスト、記録文学、伝記文学、児童文学、香港、台湾の作家も含めている。

新左派の拠点として『読書』雑誌が挙げられるが、1997年代二期の『読書』において、「大衆・文化・大衆文化」の特集が生まれ、戴錦華の「大衆文化の隠された政治学」は、新左派の代表的な大衆文化批判のテキストとなった。また「文化研究」がその領域を拡張して、文学理論界に華々しく登場したのは、「日常生活審美化」の論争においてであった。本来「文化研究」は社会学の領域であるが、文学、文芸学にも浸透していった。⁴⁾

(3) 同時代におけるフェミニズムと女性研究者

周蕾との比較：今世紀に入ってから、国内外の近現代文学研究は、文化研究及び映画研究を視野に収め、日本においては、比較的早い時期に、在米の華人研究者、周蕾の著作が翻訳・紹介され、第五世代監督を中心に中国ニューウェーブを分析した『プリミティブへの情熱』は、日本でも中国映画研究の基本文献とされ、デビュー作である博士論文『女性と中国のモダニティ』は文学史研究、女性作家研究に広範な影響を与えた。フェミニズムと映画研究という二つの視点から見ると、戴錦華と重なる点もあるが、同時期に活躍する、同世代の二人の女性研究者の方法論と学術成果には、多くの相違点も見られる。

ポストコロニアル批評の旗手である周蕾は、新歴史主義、反本質主義に依拠し、歴史的コンテクストにおける文化の解釈を、フェミニティを視点として摸索するが、文学史においては鴛鴦胡蝶派小説と、それを継承する張愛玲に焦点が置かれる。『女性と中国のモダニティ』における、張愛玲への言及は、次の様なものである。近代中国の文学を扱う時には、ファッションと同じく、ディテールと女性らしさが複雑に関係している歴史という点が論じられなければならない。ディテールの概念的な含意は広く複雑である。張愛玲の場合は、ファッションだけでなく、ものを書くこと、国民文化の概念においてもその含意が貫徹しており、ディテールとフェミニティとの内部関連性とは、ポストコロニアルなコンテクストの一部としての近代中国の文化を読む上で有効な概念となる。張愛玲が踏襲した鴛鴦胡蝶派小説は、女性化された大衆的な文化として、政治的には不安定で、文化的には移行期にあるコンテクストにおいて、争点化される。張愛玲のテキストは、五四白話文学における「物語の適切な構造」によって、次第に排除されていく。張愛玲の著作に共通に見られる官能的な洗練は、「大きな」歴史的問題を背景へと後退させる傾向にあり、モダニティ、革命性との対局にあると考えられている。

一方で、戴錦華の女性文学史においては最終章において、張愛玲についても論稿が見られる。淪陷区における生存の現実が蘇青にもたらしたのが、女性の状況についての啓示と隠喩であるならば、張愛玲の場合にはそれが荒涼とした廃墟の意象（イメージ）であった。彼女の小説には二種類の人物が登場する。それは美しく、脆弱で蒼白の、絶望した女性、年齢不詳の永遠に「年若い」男性とである。張愛玲の世界は畢竟女性だけの世界であるが、そこには“五四”言説における母娘の連帯、同体など瞬時の一体感すら見られない。張愛玲の叙述には母と娘の間にさえ、名状しがたい阻隔と仇恨がある。『傾成の恋』については張愛玲の最も優美かつ精巧な作品として詳細な分析がある。

李小江との比較：また多くの学術的な実践によって、1980年代のフェミニズム研究を主導した李小江と比較した場合にも、戴錦華のフェミニズム研究は、90年代と、新世紀の二

度の時代転換を経て、現在尚大きな進展を見せており、今後の方向性が注目される。

最近主張されるフェミニズムの中でも代表論者たる李小江の言説は、かつてのエコロジカルフェミニズムに見られたような女性固有論の色彩が非常に強い。文革期に抑圧されていた女性性を主張し始め、差異を意識することから、男女の絶対的不均衡を受け入れるとともに、ナショナリズムを強調し、抽象的人間を否定した。平等派と差異派というフェミニズム特有の対立図式が、中国においても再演される。中国的特色としては、個人差が評価されず、女性は常に集合体として位置付けられる。経済建設優先の路線が定着する80年代後半には、ジェンダーをめぐる論争が繰り広げられる。

広い意味での中国政治文化を構造化する視点としてのフェミニズムは、歴史的視点も含めて、本質的に李小江とは趣を異にする。その旺盛な批評執筆活動は圧巻であり、グローバル文化想像と、メディアと、文革後の女性言説、ポスト啓蒙時期の人文空間と、啓蒙文化を見る上で、戴錦華の著作はフェミニズムの枠を大きく超え、国族、グローバル資本主義、新左派理論、新时期女性作家論、女性文学史研究まで複数の領域横断的な活動において、出色のテキスト分析を、展開している。

80年代の李小江から、90年代の戴錦華への移行について、タニ・バーロウは次のように述べている。

「ラカン派の精神分析批評による中国のフェミニスト・リーディングもまた、1980年代後半における文化理論の男性優位主義に対して批判を口にするが、ポスト毛沢東時代の女たちが置かれた苦しい立場については、暗に李小江の苦しい位置づけを批判する結論に達している。なかでも不朽の作品と言えるのが、孟悦と戴によって書かれ、1989年の啓蒙叢書の一部として出版され、いまに至るまで強い影響力を持つ『歴史地平線の女たち』（『浮出歴史地表・現代婦女文学研究』）である。1917年から1949年にかけての中国女性文学を概観したこの書の序文は、50ページにわたってクリステヴァとラカンの精神分析批評を通して、中国のフィクションにおける女たちの伝統について論じている。孟と戴は近代中国女性文学のテキストに焦点を当てている。それらは批評の中で、抑圧的な毛沢東の世界に対するラカンの想像界を復活させることができる。近代フィクションのなかにコード化された隠された歴史記述である。「女たちは歴史の死角である。」と彼女らは言う。「しかしながら女の問題は、単にジェンダーの関係やジェンダーの平等性といった問題にのみ還元されるものではない。むしろそれは、我々が歴史を展望し、解説を与えるその全体にかかわる問題なのである。」

「歴史的研究方法論は、孟と戴にとって、ラカン-フロイト派のレトリックを、馴染み深いマルクス主義の経済目的論のなかに接ぎ木するものだった。彼女たちが、それによって行った主張は、李小江のそれとそれほど大きく違わない。重要な違いはむしろ、その実践の場にあった。……中国のラカン派のプロジェクトは、丁玲にはじまる中国女性文学の伝統を

再結集して、文学の実践の場で女性の自我を養成したのである」⁵⁾。

(4) 戴錦華の理論研究

戴錦華は、フェミニズム思想家であるが、90年代中国学術界において、独特な位置を占め、マルクス主義映画批評家、映画史学家、ラカン文学評論家であり、ラカン、アルチュセール、クリステヴァなどフランスの文化資源から多くを負っている。孟悦、張京媛とともに「中国女性エクリチュール」を確立したとされている。

1995年には『鏡城突圍：女性・映画・文学』において、ラカン—マルクス主義の理論により、主体としてのフェミニズムを提唱した。映画の形象と、女性作家の創作から、大衆文化産業、社会テキスト、啓蒙においても李陀主編の『当代大衆文化批評叢書』において、『隠形書写：90年代中国文化研究』と、『書写文化英雄：世紀之交的文化研究』の二つの専著を著した。李小江のように、起源的な差異への注目は、精神的な動力と権力を分割するため、真の女性主体と女性意識を疎外する可能性がある。戴錦華は、「人格」は将来のものであり、女性の地位問題は、社会的、精神的な解決が為されていないため、主観の社会形式が欠如していると述べる。孟悦と戴錦華は、「中国女性エクリチュール」理論の基本的な仮説は、「女性」が国族化されたジェンダーの主体である、という認識である。そして、クリステヴァ『中国女性について』に見られる、80年代末における理論的な限界を超克しようとするものであった。

孟悦と戴錦華によれば、「中国女性エクリチュール」は、三つの歴史的段階に分けられ、五四時期（1917-1927年）は、女性の差異を意識する女性作家により創作が開始され、彼女たちは明白に異なる潜在意識を具えているとしている。国民国家形成と都市化、男性の政治イデオロギー復活の時期には、異性からの眼差しが女性に注がれ、（1927-1937年）、「女性エクリチュール」の伝統において、重要な作家は日本占領時期に出現し、（1937-1945年）自己の主体について、女性主体が十分な自我意識を獲得したとする。そして張京媛による『歴史の地表に浮かび出る』の学術評論によれば、20世紀80年代の改革は、30年代以来の長い空白を経て、女性文学と女性批評復興の時期に当たる。

文化研究は、最も主要な障地であり、そこにおいて、反大衆文化の持久戦が展開される。『歴史の地表に浮かび出る』において確立された「女性エクリチュール」は、その後、極めて重要な前衛の障地を形成した。そして戴錦華の手中において、それは中国文化改造の可能性を秘めており、その実践は「学術領域」から、映画研究、文学批評、文化研究、大衆文化批評へと拡大していった。

ここにおいて、21世紀に入ってから文化研究においても、80年代初期と同様、「女性エ

クリチュール」は重要であった。『世紀之門』において戴錦華は、90年代の「女性エクリチュール」に伝統の復興を見出し、それは未だ「真実界（現実界）」においては、歴史的に無意識の状態にあるとした。また映画研究に対する彼女自身の考え方は、エリートによる啓蒙文化政治の伝統への責任感を継ぎ、文学研究と映画研究を明確に区別するものであった。文学と映画では媒介する手段が異なるので、仮に審美の芸術判断、あるいは文学の批評が、文学領域では重要な実践であったとしても、中国映画史のコンテクストにおいては、それを糸口にするのは難しい。映画は現代工業文明の時代の芸術であり、「不純」なものが、剥ぎ取られ、残された芸術的要素は微小であり、歴史的な靱帯を見出すには足りない、と彼女は考える。

彼女の文学研究が女性史の再現の境界を超えようとするのに対して、映画研究は、フランクフルト学派の風格を備えたフェミニズム批判に潜入し、男女の主体を突破する方向に向かった。

戴錦華の映画批評は主にラカン派の精神分析に依拠するとされている。ラカンはフロイトの「圧縮」および「置き換え」の概念をかなり大胆にずらし、前者をメタファー、後者をメトニミーと同一視した。メトニミーは、無意識の論理そのものを表し、欲望は欠如を出発点とするシニフィアンの連鎖であるメトニミーの線に従う。

有名な現実界・想像界・象徴界の区別においても、自分の鏡像によって自己確認を行う「想像界」を支配するのはメタフォリックな原理であり、言語を通じて他者との相互的な関わりの中で、自己の探索を続ける「象徴界」を支配するのは、無限の遁走するメトニミック（「換喩的」）な原理である。こうしてメタファーと、メトニミーは「言語活動のように構造化されている。」無意識を統御するメカニズムである。この「象徴界」の論理を、無意識の論理として素描する。テキストの無意識を考えることは、主体は無意識的な知に対しては、決して直接的に接近出来ないということである。無意識が探究の対象でもあり、主体でもある。フェミニズムと呼ばれる思想的・社会的運動は百花繚乱の知見を交錯させつつ現代に至っている。

(5) ポスト冷戦時期の文化批評

2003年に御茶の水女子大において行った集中講義録である、『中国映画のジェンダー・ポリティクス——ポスト冷戦時代の政治文化』は、戴錦華自身が、序論で述べているように、東京という異郷の地で、「ポスト現代世界の喧騒と疎外」を肌で感じ、中国映画史研究とジェンダー研究、大衆文化研究を総合させ、「視覚構造」自身の西洋中心性や、東アジアという枠組みでの、グローバル資本主義の衝撃と蹂躪、差異の体系を分析することによる、中

国文化政治への考察、という彼女自身の学術研究の転換点を示している。2003年は日本による対中投資が過熱する中で、小泉政権下での対日批判が高まる「政冷経熱」の時期である。この中で、彼女の理論的実践と、新左派イデオロギーが強く窺えるのは、第2章と第4章である。まず、「扮演」、即ち古典文学から文革時期までの、女性の「男装」を扱った部分を見て行きたい。

「扮演」の物語

木欄の物語において、「父の代理」ではなく、「男装」して従軍したことに着目し、「トランスヴェスタイト（異性装）」の概念から、女性の主体性の現れが、自覚的に男性の社会機能を演じることによって、実現、完成するのであり、前近代中国のジェンダー秩序に対する越境であるとする。文化の内部において、ジェンダーは本質的、絶対的な表象ではなく、時として越境できる社会的機能であった。中国近代の婦人解放運動は、ヨーロッパの本質的ジェンダーを参照しながら、男性思想家により、近代的男権が、封建的父権にとって代わるプロセスであった。

よって、中国の近代化プロセスによって、女性はジェンダー集団として、『歴史の地表に浮かび出て』きたけれども、同時に、近代的男権の新たな規範力は、女性、新女性が、男性と相対する差別的なジェンダー・アイデンティティを受け入れることを要求し、前近代中国の文化表象における通り抜け可能な、社会的機能としての空間は閉じられる。

社会主義中国の主流エクリチュールにおいては、父権、男権社会における女性の「第二の性」としての地位、男尊女卑の歴史文化、歴史的惰性も転覆したかのようなのであるが、毛沢東時代、「旧中国」の女性は、女性の悲劇と社会的表象として、被抑圧階級の運命の代名詞となった。階級を唯一の尺度とする政治文化構造において、ジェンダーについての語りは、社会政治のレトリックとしては消滅する。また男女平等は、ジェンダー的差異の否認ともなった。社会における主体の地位を獲得すると同時に、ジェンダー主体として、自らの地位を享受し表現する前提条件と可能性を喪失した。

毛沢東時代が終わると、混沌とした時代の変わり目にあって、差異の復活と、男性がジェンダー的権力の回復を、意識的に要求する表現も現れた。そしてこの時期に、より直接的に社会表象とジェンダー表象の新しい主流の傾向を表現したのは、謝晋監督の二つの映画であった。この時期、女性知識人の社会的立場と、主体定位との間の分裂と矛盾が、次第にはっきりと浮かび上がってきた。80年代に知識人が形成した共通認識の思想的前提、リベラリズムに対する誤読、および欧米フェミニズムが生まれた歴史と現実のコンテクストに対する無知と錯覚のため、多くの女性知識人は依然として、中国社会の進歩が、女性集団にとって一層の進歩をもたらすと信じており、その「進歩」の足並みが、最初は隠微な形で、

後には公然と女性を抑圧し、放逐するプロセスをすでに開始していることを無視した。

「物語」の中の物語——ポスト社会主義時代のジェンダーと階級

1992年以降、中国社会で最も突出した社会的事実、急激な貧富の格差であり、民主化プランは行き詰まり、「歴史の詐術」により、「市場化」「グローバル化」は、実際には私有化、資本主義化のプロセスに振り向けられた。資本主義化進展の必然的で重要な要素とされた国有大型企業の転換プロセスは、1949年以来一度も無かった「失業の衝撃波」をもたらした。貧富の両極化というこの顕著な社会的事実、90年代中期に再び危険な社会的不均衡を生んだが、長期間にわたって、社会的「匿名」状態、文化的「失語」状態に置かれていた。政治権力と金銭資本の「直接的な」交換、「内部的植民地化」と呼ばれる過程が進行し、北京、上海という拡張を続けるメガポリスと、珠江デルタに密集する都市群が中心となり、都市地域の経済が急速にテイクオフし、多国籍企業の巨大な「加工場」となるために、きわめて廉価で、しかも何らの法律的、制度的保障もない労働力資源を提供した。

20世紀末に中国社会が経験した富の再分配と、貧富の両極化の過程は、政治的特権と金銭の取引、地域格差、都市と農村の格差の拡大、ジェンダーと年齢による差別、知識/資本というように、様々なレベルと局面で同時に出現した。それは明らかに中国社会内部で、階級差別が再構築され、主流イデオロギー内部で階級の合法性が書き直される過程であった。

世紀の境目にある中国の特殊な点は、第一に階級とジェンダーの語りの相互隠蔽と、冷戦の歴史が複雑に絡み合ったことであり、第二には、非常に原始的/野蛮な資本主義の色彩を帯びたこの社会的現実と、「ワシントン・コンセンサス」を基礎に構築された「グローバル化」の全体像、およびポスト産業社会と、消費主義のイデオロギーが併置され絡み合ったことである。経済的プラグマチズムや、消費主義などの社会的レトリックを採用しても、発展主義の見取り図が描き出す未来に対する約束を部分的に借用しても、それは依然として激化する貧富の分化と言う現実と、社会主義のイデオロギーの間に存在する深刻な矛盾に内在的に直面せざるを得ず、そしてそれに対応するすべを持たなかった。

ここに社会的レトリックとしての女性の語りが「レイオフされた女性労働者」「出稼ぎ女性」に関する物語が、トップダウンの新主流イデオロギーと大衆文化の構築過程によって、ジェンダーは「少数者」の代名詞として日増しに先鋭化する社会矛盾を転移するために用いられた。社会的レトリックは階級の現実からジェンダーの語りへ、そしてまた新階級（中産階級）言説の構築へと変化し「家庭回帰」への議論も、可視的なジェンダーの語りとして不可視のジェンダーの生存の現実を隠蔽している。階級の浮上とジェンダー秩序の再構築という現実に対する隠蔽と相互隠蔽は、体制の論理としてだけでなく、次第に主流化していく

「エリート」知識人の言説としても構築された。

新しい思想と批判の資源を発掘する紆余曲折の歴史の中で、「中国的特色」がなくもない新自由主義的理論が思想界に君臨する状況を作り出した。この社会的現実には、20世紀から新世紀のはじめにかけて、新たな国際、国内状況のもとで次第に「水面」に浮上してきた。政府権力と悲壮な想像に満ちた対抗的知識人集団、そしてかつて中国の「公共圏」を構築すると期待されながら、しだいに巨大なメディア権力を構築して新たな利益集団となったメディアは、表層のレベルにおいては互いに衝突する。

対抗言説の苦境

90年代末に対抗言説の矛先が、中国社会の苛酷な貧富格差の現実に向けられ、中国社会の資本主義化プロセスに向けられ、社会低層の民衆が経験した剥奪と苦難に向けられた。さらに1995年に世界女性会議が北京で開かれ、中国におけるフェミニズムの全面的普及を促進した。そしてフェミニズムとジェンダー批評が提供した空間にも、女性の社会、文化的地位が下降し続け、社会のさまざまなレベルや領域で、性差別が露骨さを増していることに対する言説が現れた。

改革開放後、女性知識人集団はきわめて自然に、西洋フェミニズムの資源のうち、白人中産階級のフェミニズム理論と系譜を選択的に受容した。20年にわたる社会文化実践は、都市の知識女性の文化と表現の文脈においては有効だったが、90年代中後期の貧富分化過程における、下層女性の悲劇的境遇や、社会的苦難に向き合うことが出来なかった。90年代の中国におけるフェミニズムの流行は、国内の社会、政治実践において対抗的な勢力となると同時に、グローバル化の進展を示す標識と景観の一つとなった。

フェミニズムの社会文化実践が文学や文化の領域から社会科学の領域へ転換することを後押しした。下層の弱者である女性集団のテーマが、無意識的に中国女性のテーマを発展主義のグローバルな景観の内に組み入れ、グローバル化の過程における中国の第三世界的地位を際立たせることになった。

階級とジェンダーのテーマが、現代中国の直面する社会問題のすべてを説明するわけではない。だがここで階級とジェンダーの問題を突出させるのは、多次元の批判的思考と社会批判を意味する。官製イデオロギーに対して、そして形成されつつある文化産業と大衆文化に対して、さらに大衆が担い、またその構築に参加している新主流イデオロギーに対して、それは同時にマルクス主義も含めた様々な批判的思考に対する反省検討でもあり、自らもそこに身を置く中国フェミニズムの社会的実践とその困難に対する内省と批判でもある。階級とジェンダーのテーマの絡み合いは、ポスト冷戦の時代に、批判的知識人、対抗言説を有し、実践する者が共通して向き合わねばならない困難と挑戦である。

結 語

女性作家の書写（エクリチュール）と文化について、更に映像メディアによる社会経済分析の一端について、見て来たが、文学と映像文化を広義の「視覚文化」として捉える周蕾に対して、映画メディアの芸術性については限定的な見方をし、書写文化と区別する戴錦華の分析視角が現れているように思う。『歴史の地表に浮かび出る』の序文にあるように、戴錦華が女性の書写に着目するのは、もう一つ別種の「女性」の歴史を描くためではなく、すでに書かれている歴史（あるいは同時代）の中の無意識、あらゆる統治機構がその正当性を証明するために、抑圧し、隠蔽した、視角の盲点を、女性の真実の存在と、その解釈によって、統治秩序の深層に潜む、既成の歴史の外に排されてきた歴史的無意識を示すためである。無意識の次元から、民族の自我の記憶の空白、周縁、隙間、言外の意、自己欺瞞などが抽出され、それは「反神話」的な、既成のイデオロギーを転覆する潜在力を持っている。

註

- 1) 戴錦華・孟悦著『浮出歴史地表—現代中国婦女文学研究—』中国人民文学出版社、2003年を参照
- 2) 戴錦華著「身体・政治・国族—従張愛玲到李安—」北京大学での講演
- 3) 戴錦華著『涉渡之舟—新時期中国女性作家写作与文化研究—』北京大学出版社、2007年
- 4) 拙著「中国知識界はポストモダニズムをどう見るか」『言語と文化』21号、2009年
- 5) T. パーロウ「李小江とその仲間たちの論争にみるポスト毛沢東時代末期の女性」『中国—社会と文化—』第16号、2001年6月 pp. 197-199

参考文献

- 戴錦華著『隠形書写—90年代中国文化研究—』江蘇人民出版社、1999年
 戴錦華・孟悦著『浮出歴史地表—現代中国婦女文学研究—』中国人民文学出版社、2003年
 戴錦華著『涉渡之舟—新時期中国女性作家写作与文化研究—』北京大学出版社、2007年
 戴錦華著『電影批評』北京大学出版社、2005年
 戴錦華著・宮尾正樹監訳『中国映画のジェンダー・ポリティクス—ポスト冷戦時期の政治文化—』御茶の水書房、2006年
 (美) 湯尼・白露著『中国女性主義思想中的婦女問題』上海人民出版社、2012年
 レイ チョウ（周蕾）著、田村加代子訳『女性と中国のモダニティ』みすず書房、2003年
 土田知則・青柳悦子・伊藤直哉著『現代文学理論 テキスト・読み・世界』新曜社、1996年